



## 今月の予定

### 聖歌練習

名古屋:7月10日17日代式後

- ・初心者の方、自信のない方のための基礎練習
- ・主日聖体礼儀後、ワンポイントレッスンをを行います。
- ・毎主日朝、発声練習をしています。ご参加よろしく。

半田:7月13日(水)12:00~

### 名古屋指揮当番

3日ピーメン松島 24日マリア松島 31日エレナ広石

### ズナメニイ研究会

7月20日1:30から。

グレゴリオチャントが西洋宗教音楽の原点であるように、ズナメニイはロシア聖歌の原点です。ズナメニイを知ることによってビザンティンとの連続性をとらえ、合唱音楽へと発展したロシア聖歌の底にある正教会聖歌の本質をさぐります。また日本語でズナメニイを歌ってみて、古聖歌の魅力を感じてみます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/chant.htm>

## 知って祈ろう - 奉神礼・聖歌入門

### 第3アンティフォン

ビザンティンでは、アンティフォンはもともと教会へ向かって街の中を練り歩く行進の歌でした。目指す教会に着くと、門の前の広場でその日のテーマソング「トロパリ」を何度も繰り返し、聖歌者はその間に聖詠を歌います。この形は今でも主宰の祭日に行われます。

一方日本では、主日に第3アンティフォンは『真福九端』が歌われています。これはパレスティナの聖サワ修道院の伝統です。ティピコン通りには『真福九端』を一区ずつ区切って、そこに指定されたスティヒラを挟み込んで歌います。詳しい歌い方は『八調経』に記載されています。

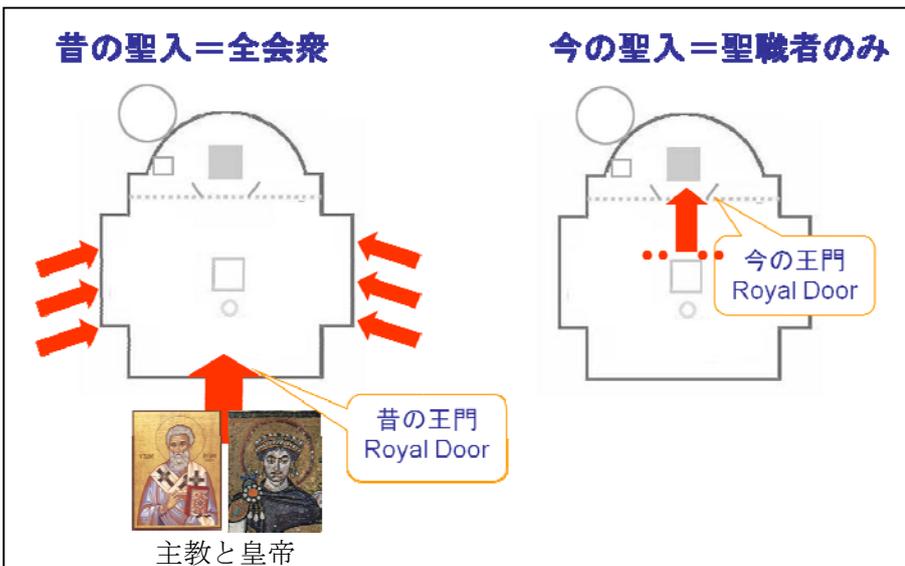
### 聖入「来たれ」

さて、門の前でアンティフォンを歌い終わると、聖堂に入ってゆきました。皇帝と総主教は『王門』と呼ばれる中央の門から会衆はほかの門から一斉に聖堂に入って

ゆきます。今の聖入は聖職者が至聖所から出て至聖所に戻る動きですが、昔の「聖入」はまさに「聖なる場所」すなわち「教会」に入っていくことでした。『王門』は今では至聖所と聖所を仕切るイコノスタス中央の門ですが、もともとは総主教と皇帝が聖堂に入るための門でした。アギアソフィア大聖堂にはほかに54も門がありました。

行進をしてアンティフォンと小連祷を歌い、門の前でトロパリを何度も歌って一斉に聖堂に入っていくというビザンティンの形式は、祈りの始まる前の段階でした。実際の「聖体礼儀」は聖入後、聖堂に入ってから始まりました。後代になって、聖堂の外で行われていた部分が聖体礼儀に取り込まれ、早課や晩課の形に倣って、冒頭に「大連祷」が行われるようになりました。

ビザンティンの古い形は、今でも復活祭の始まり（十字行、門の前でトロパリを聖詠の句と交互に歌う、一斉に入る）に残っています。



7月31日(昼食時)  
フィンランドとフランスの教会と聖歌  
- 多様性と一致 -  
マリア松島  
6月6日から10日までフィンランド開かれたISOCM 国際聖歌学会に参加してきました。20カ国から参加者があり、ビザンティン、グルジア、ズナメニイなどについての発表がありました。  
終了後、パリのサン・セルジュ修道院とブルゴーニュの小村にある生神女庇護修道院を訪れました。  
フィンランド、フランスの教会は19世紀の面影があり日本の教会と似ていました。録音、写真などで紹介します。

## ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

聖歌の伝統 J.V. ガードナー著  
「ロシア正教会の聖歌」から

ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。表はカリストス主教のFestal Menayonを参考にしました。

**早 課 その2 平日早課**

平日早課もその日に記憶される祭の大きさによって形が変わります。中祭日の場合「凡そ呼吸ある者」を歌い続いて148、149、150聖詠、その最後に讃揚のスティヒラを挿入、「光栄は、今も」に続いて生神女讃詞、「大頌栄」\*「聖三」、トロパリに続いて、重連禱、増連禱を祈ります。小祭日の場合は「凡そ呼吸ある者」は歌わず、「天より主を讃め揚げよ」から148、149、150聖詠を最後まで読み（讃揚のスティヒラなし）、続けて「頌栄」を読み、増連禱、挿句のスティヒラが歌われ、「至上者や」に続いて聖三祝文から天主経、トロパリ、重連禱の順になります。詳しい

ことは月課経（その一部が祭日経に収録）、三歌斎経などの指示を見ます。また固定祭日の周期と三歌斎経五旬経の周期の組み合わせは大変複雑で、ロシアでは毎年『奉神礼の手引き』が発行され、その指示に従って行います。

大斎の早課は小さな祭日の早課に準じていますが、小祭日では早課の冒頭に「主は神なり」とトロパリが歌われるのに対して、斎日には「ア ril l i ya」と聖三の歌が歌われます。

\*「至高き」に続く頌栄を歌われるとき「大頌栄」、歌わないとき「小頌栄」と書いてある場合もあります。

詠頌が誦される早課	大詠頌が歌われる早課
*始まりの祝福と祝文	
*第19聖詠、20聖詠誦読。	
*十字架のトロパリとコンダク。	
*「主憐めよ」3回の短い連禱	
六段の聖詠（第3、37、62、87、102、142聖詠）誦する。	
大連禱	
「主は神なり」と句。続いてその日のトロパリと生神女讃詞を歌う。	
聖詠のカフィズマ二つまたは三つ誦読。（曜日や年の時期による）	
各カフィズマの後その日のセダレン歌う。	各カフィズマのあと小連禱、その日のセダレン歌う。
50聖詠、誦する。	
輔祭「主や爾の民を救い」「主憐めよ」12回。	
カノン第1歌頌と第3歌頌。イルモスは歌う。トロパリは誦する。	
小連禱、セダレン（その日に二つのことが記憶される場合は小さい方のコンダク）	
カノン第4、第5、第6歌頌	
小連禱とその日のコンダクとイコス	
カノン第7、第8歌頌	
生神女の歌「我心は主を崇め」アンティフォン形式で歌う。	
第9歌頌。続いて「常に福」を両聖歌隊で歌う。	
小連禱。	
エクサポスティラリ（光耀歌）できれば歌う。通常誦される。	
<b>讃揚歌 第148、149、150聖詠</b>	<b>讃揚歌 第148、149、150聖詠</b>
スティヒラが挿入されることもある。歌うまたは誦する。聖詠は「天より主を讃め揚げよ」から始める。	常にスティヒラが挿入され、歌う。「凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ」から始める。
誦経者は聖詠（またはスティヒラ）に続き「光栄は爾光を顕わす主に帰す」に続き「頌栄（至高き）」を誦する。	最後のスティヒラに続いて、司祭「光栄は爾光を顕わす主に帰す」に続いて大詠頌を歌う。聖三の歌で終る。
	その日のトロパリと生神女讃詞を歌う。
<b>増連禱</b>	<b>重連禱</b>
挿句のスティヒラ（カノナルク形式で歌う）*	
聖三祝文、至聖三者、天主経を誦する。	
その日のトロパリとそれに続く生神女讃詞を歌う。	
<b>重連禱</b>	<b>増連禱</b>
司祭と詠隊（会衆）の終わりのやりとり。続いて発放。	
早課に引続き一時課、コンダク「生神童貞女や慶べよ」で終る。	

\*カノナルク形式：先導者が祈祷文をまっすぐに読み、聖歌隊（聖歌者）がメロディをつけて同じ祈祷文を歌う。